英語における補文省略現象*

井　上　　徹

0. はじめに

英語における省略現象を大別すると、名詞句の省略、動詞句の省略、補文の省略の 3 つが考えられる。本稿では、この中でも最も議論されることが少ない補文の省略現象を取り上げる。具体的には、以下の談話の応答文 B に見られるような動詞または形容詞の音形を伴わない定形補文を考察の対象とする。[1] 以下、定形補文の省略を含むと考えられる文を補文省略構文と呼び、空補文を "ϕ" の記号を使って記す。

(1) A : Did the President and Yeltsin talk about this?
B : I don't know ϕ.　　(*CSPAE*, WH94)

(2) A : On the other hand, to have examples where there's ambiguity is good too.
B : I agree ϕ.　　(*CSPAE*, COMM8A97)[2]

(3) A : Is he going to Arkansas on the way to Houston?
B : It's possible ϕ. But I don't know ϕ yet.　　(*CSPAE*, WH94)

補文省略構文は、上の例のように、典型的には先行する質問文または陳述文に対する別人物による応答文という形で出現するが、これは空補文が出現する際の必要条件ではない。同一人物の連続する発話にも現れることがあることを以下の例で確認しておきたい：

(4) Let's see what Gloria has to say. It might be the same vein. I'm not sure ϕ. (*CSPAE*, COMR797)

(5) It might still be called mileage. I don't know ϕ. (*CSPAE*, COMM8A97)

第 1 節では、先行研究で missing complement（不在補（助）部）、null complement anaphora（空補文照応）、complement ellipsis（補文省略）などとして論じられてきた関連事項を概観し、これまで提案されてきた空補文に関しての 3 つの分析を中心に検討する。第 2 節では、省略（または言わないで了解）されている補文の復元についての方略を考察し、空補文が被前提節の命題に照応している一方で、補文の wh 素性は談話に依存することを示す。第 3 節では、もう一つの定形補文省略構文と考えられる挿入節構文との比較を行ない、補文省略を許す述語の特徴を議論する。

1. 先行研究の事例

文献では null complement anaphora、missing complement、pragmatically controlled zero anaphora という名前のもとで、「省略されている（または、省略されているかのように一見みえる）complement」が論じられてきたが、動詞の（直接）目的語を表わす場合であったり、補文を指す場合でも不定詞節を指す場合であったり、定形節を表わす場合であ

ったりして種々の混乱を引き起こしてきた。ここでは、定形補文の省略という研究対象の絞り込みとこの考察の妥当性を主張するため、先行研究で論じられてきた分析や関連事項を検討する。

1. 1. 生成文法の 3 つの分析

Hankamer and Sag (1976) は、省略構文に現れる照応要素を統語的にコントロールされる surface anaphora と語用論的にコントロールされる deep anaphora に分類した。彼らによると、deep anaphora は言語的文脈にのみ依存して先行詞が了解されるのに対し、surface anaphora は非言語的文脈にも依存して先行詞が了解されるという。そして、次の例文に現れるような空補文を音韻的、統語的には表層構造には現れないが意味的に述語の欠如項を満たす照応形と捉え、それを NCA (null complement anaphora) と呼んでいる。ただし、彼らは (6) のように音形を伴わない *to* 不定詞補文だけを扱っている。

(6) a. I asked Bill to leave, but he refused ϕ.
b. We needed somebody to carry the oats down to the bin, but nobody volunteered ϕ. (Hankamer and Sag 1976: 411)

省略されている要素は、それまでの研究では、先行詞と照応詞の間で成立する同一性の条件 (deletion under identity) と構造上の条件のもとで統語レベルの操作である削除変形をうけるものとされていた。確かに上の例では、それぞれ空所に to leave、to carry the oats down to the bin という先行詞と語彙的に全く同じ要素が入ると仮定される。しかし Hankamer and Sag (1976) は、(6) のような空所には削除変形が関わっていないという。次の例を見てみよう。

(7) a. I don't approve.

b. Don't you think we should complain?

(Hankamer and Sag 1976: 411)

(7a) は、夕食時に子どもにチョコレートを食べさせる父親に向って母親がいった発話だとすると、先行詞 (to feed baby chocolate (for dinner)) は非言語的な場面に依存していることになる。(7b) は、映画館で映画を観ているときに、近くの席でポップコーンをむしゃむしゃ食べているカップルに苛立って同席している人に言うことができる。つまり、文法的に先行詞が存在している（＝言語的に明示されている）必要がないことを示している。その意味で、彼らは NCA を語用論的にコントロールされている deep anaphor だとみなす。

NCA は削除変形分析に対して提出された第 2 の分析であり、その用語は Grimshaw (1979), Bresnan (1982), Lahiri (2002) などで使われている。NCA 分析は概略、述語の下位範疇化（補文の統語タイプ）と意味タイプにより空所が照応形として認可され、談話文法がアクセスする LF（論理形式）で解釈を受けるというものである。この NCA 分析に対しては、Napoli (1983) が基底生成分析（以下、基底分析と称する）という第 3 の分析を出して、Grimshaw の NCA 分析に批判を加えている。Napoli は省略されているといわれている補文の位置にゼロの照応形を認めないため、NCA とは呼ばず、missing complement（不在補(助)部）というにとどめている。彼女が提案する基底分析とは、空所には表層構造にも深層構造においても何も存在していないというもので、その理由はこの構文で用いられる動詞が他動詞用法と自動詞用法の両方をもつものに限られ、当該の構文の動詞はすべてその自動詞用法だという。

Napoli が NCA 分析を批判するときに一番拠りどころにしていること

は、空所に照応形を仮定すると以下の例にみられるように逆行照応制約 (Backward Anaphora Constraint) に従わない例が出てきてしまうというものである。

(8) a. John succeeded ____ , even though he didn't try to impress.
b. John did promise ____ , although I still worry whether he is coming. (Napoli 1983, 14)

代用表現は、統語的にコントロールされている照応形でも語用論的にコントロールされている照応形でも、逆行照応制約に従わなければならないからである。

(9) Backward Anaphora Constraint:
An anaphor cannot be anaphorically related to a nonanaphoric segment that it precedes and commands in surface structure.
(Hankamer and Sag 1976: 422)

仮に (8) の例文の下線部（＝動詞の補部）に照応形があったとすると、照応形はその先行詞に先行し、かつ、統御してはいけない、というこの制約に違反することになり非文を予測してしまうが、例文は不適格にならないというものである。しかしながら、今日的な視点から見直してみると、(8) の副詞節はコンマ・イントネーションで区切られている離接節 (disjunct clause) であり、先行する文の内容に関しての話者の評価や判断を示す表現である。つまり、先行する文と非制限用法の副詞節は構造上、同じ節点 (IP=S) を共有していないことになり、逆行照応制約の違反とは何ら関係のないものとなる。また、彼女は省略されているように見えるとして次の定

形補文省略構文の例 (10b) を挙げているが、これについては何も説明していない。

(10) a. Is he coming?
b. I suppose. (Napoli 1983: 1)

当時の理論では確かに逆行照応制約と (8) の例を持ち出して NCA 分析を批判することは可能であったが、(10) の談話はもともと質問文とそれに対する応答文のペアであり、異なる二つの文を持ち出して照応形とその先行詞の構造上の位置関係を規定することはできない。また、Napoli の基底分析は不定詞補文節の省略構文に現れる動詞だけを考慮しているため、定形補文の省略構文については *(im)possible, surprised, doubtful, sure* などの形容詞も用いられることについては全く抜け落ちている。

以上、生成文法の枠組みで提案されてきた 3 つの分析を概観してきたが、空補文の位置にはもともと何も存在しないとする Napoli の基底分析はそれ自体ここで否定されるべきものではないが、かといって NCA 分析を完全に反駁できるほどのものでもないと思われる。一般的に「省略」現象と言われるものが初期の変形文法の段階で、「削除」という変形として取り扱われてきた関係で補文省略構文が論じられてきたわけであるが、文文法の言語現象を取り扱う生成文法の分野で語用論的にコントロールされる照応形が議論されてきたことは興味深い。

1. 2. Null complement の定性について

先行研究で null complement が取り上げられるときには定要素の省略か不定の要素の省略かという定性 (definiteness) の問題が論じられてきている。[3] ただし、その場合は述語の補文ではなく補部（＝目的語）が問題にな

っており、deletable object, implicit complement, pragmatically controlled zero anaphora などの術語が用いられている。

前項の議論とも関連するが、表面上は自動詞であるが潜在的な目的語を含意する *read* や *eat* をはじめとする一群の動詞が固有の意味や文脈によって省略可能な目的語の読みを決定するという。たとえば、次の談話のように動詞 *bake* の補部が省略されているとすると、焼いているものがパンやケーキなどのペーストリーに限定され、ハムやポテトではないことが含意されるが、不定要素の省略を許すといわれる。

(11) A : What's John doing?
B : He is baking ϕ.

これに対して、次の談話の第 2 文の動詞 *wave* の潜在的な目的語はハンカチではなく、手にしか解釈されないといわれる。

(12) John waved his handkerchief at you. Now you must wave back ϕ.

このように、省略された目的語は *read* や *eat* のような不定の解釈を許す場合と動詞固有の特徴から文脈などに左右されずに定の解釈しか許さない場合がある、というのが定性について議論の骨子である。既に述べてきたように、第 2 節で考察するのは定形補文の省略現象だけを取り上げるので、定性の問題についてはこれからの議論から外れる。

1. 3. 定形補文の省略

これまで見てきたように、null complement (anaphora), missing complement など名前で扱われてきた省略現象は、動詞の補部（目的語な

ど）と不定詞補文に限られ、定形補文の省略現象を取り扱った論考は極めて少ないのが現状である。その中でも最も包括的にこの現象を記述したのが Halliday and Hasan (1976) である。彼らは「節の省略」を扱った章の一部で定形補文の省略がどのような状況の中で起こるかを記述し、省略された補文の先行詞の問題について触れている。また、記述文法の立場からは Huddleston and Pullum (2002) にも空補文の解釈について若干の考察が見られる。生成文法では Grimshaw (1979) が補文選択と語彙の意味特性についての論考の中で、NCA について考察している。次節で指摘するように、文文法という枠組みの中での論考のため、文（後述する「被前提節」）中に生ずるモダリティー表現については無視されているが、先行詞復元のための方略について考察している点で興味深い。次節では、Halliday and Hasan (1976) の用例と Grimshaw (1979) の NCA rule を考察する。

2. 省略された補文の先行詞について

前節で述べたように、省略されていると考えられる補文の位置にゼロ形態素が実際に生じているのかどうかといった理論内部の議論はともかく、空補文という音声的にも統語的にも具現化されてない補文が先行する文のどの部分と照応しているかという先行詞に関する問題が残る。この節では Grimshaw (1979) の分析を確認しながら、省略された補文が被前提節の命題部分に照応していることを中心に述べる。

2.1. タイプ照合

まずは以下の談話を見てみよう。

(13) Question: Did John leave?

Response: I don't know.

(13) の応答文において、述語 *know* は音韻的に空（ゼロ）の要素に従われていると仮定する：

(14) Question: Did John leave?
Response: I don't know [$_{CP}$ ϕ].

空補文の位置にあるとされる照応要素の存在は述語の下位範疇化 (subcategorization/c-selection) により認可される。動詞 *know* は統語範疇として CP か NP を指定し、意味に関する指定（以下、意味タイプと記す）として疑問を表す Q か命題を表す P をとる。Grimshaw (1979) の補文選択 (complement selection) の表記法に従えば、動詞 know の語彙記載項 (lexical entry) は (15) のように表せる。

(15) *know* [____ NP/CP], [____ P/Q]

(14) の談話では第一文が疑問文であり、疑問文の Q 素性と応答文の動詞がとる Q 素性が一致している。そのため、(16a) のように wh 補文を予測することができる。しかし、ここでは第一文の統語素性にかかわりなく [-wh] の補文の生起も可能なことに注意したい。(16b) を参照のこと。

(16) a. I don't know whether John left.
b. I don't know (that) John left.[4]

一方、(17) では質問文 "Did John leave?" に対する応答文が動詞 *agree* の意

味タイプに現れないので不適格になる。(18) で素性の不一致 (feature-mismatch) を確認しておこう。

(17) Question: Did John leave?
Response: *I agree.

(18) Question: Did John leave?
Response: *I agree whether John left.[5]

次に (19) の談話を検討する。

(19) Question: Did John leave?
Response: It's possible.

(19) の応答文はその疑問文に対しての可能な答えとなるが、ここで問題が生じる。というのは、疑問文が Q 素性を持っているのに、応答文の述語 *be possible* は、(20) に示されるように、意味タイプとして P を表わす *that* 補文しかとれないからである。

(20) a. It's possible that John left.
b. *It's possible whether John left.

そこで Grimshaw は先行する疑問文が直接空補文にコピーされることができないことに気づき、コピーされるものはこの疑問文から疑問の演算子 ? を除いた部分（＝対応する平叙文）になるといい、(19) の応答文として最も適切な表示は (22) になると述べる。

(21) ? (leave (John))

(22) possible (leave (John))

ここまでの Grimshaw (1979) のまとめからも明らかなように、彼女は先行する発話の「対応する平叙文」が省略された位置にコピーされると示唆するが、先行詞の解釈においてなぜ疑問演算子が除かれるのかについては言及していない。これに関しては直接、間接を問わず、発話行為理論の枠組みやそれを応用した理論（例えば Lyons 1977 や中右 1994）などで既に言われてきたことだが、補文省略を含む文に先行して先行詞の候補となる文（＝被前提節）の中から疑問形式や法助動詞などの話し手の心的態度 (speaker's attitude) を表わす部分を差し引いた部分～つまり、述語とその項からなる命題部分～に照応すると考えられる。

Grimshaw (1979) の論点は、補文選択が厳密下位範疇化という統語的な指定だけでなく意味の指定も必要であるという一点に尽きるため、次の談話をあげてはいるものの、NCA が質問文中に現れている文の命題を表す部分に照応している理由については全く説明していない。

(23) Statement: Guess what, John is telling lies again.
Response: Yeah, I've already found out.[6] (Grimshaw 1979: 292)

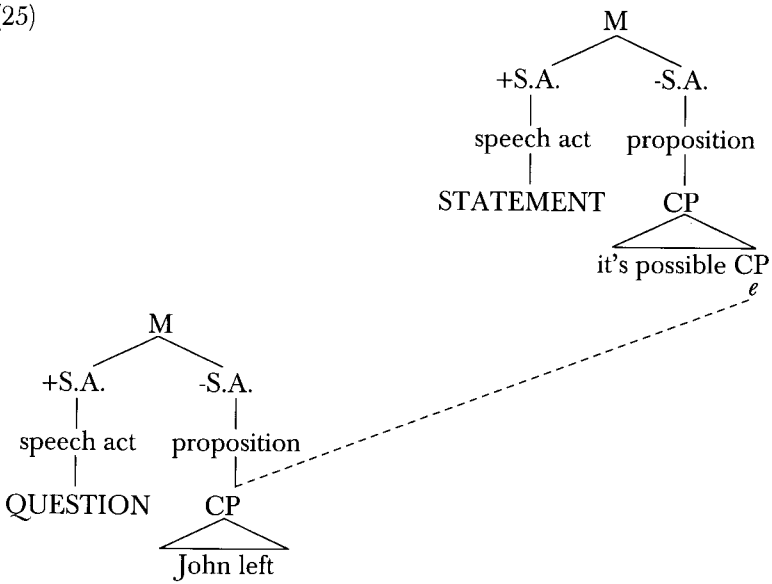
ここで (19) の談話を (24) として再録し、空所の先行詞復元の方略を考えてみたい。

(24) Question: Did John leave?
Response: It's possible [$_{CP}$ ϕ].

まず、述語 *possible* が取る補文タイプがゼロ形態素（＝空補文照応詞 null anaphor）の生起を認可し、意味表示のレベルで先行する質問文と照応関係を持つものと仮定する。また、質問文と応答文はともに発話としての文の意味 (M) を持ち、+speaker's attitude (+S.A.) と -speaker's attitude (-S.A.) という二つの領域に分割されると仮定する。

(24) の質問文には認識様態を表す (epistemic) 助動詞などのモダリティーを明示的に表す語彙項目を含んでいないが、発話行為 (speech act) の種類を表す QUESTION が "Did John leave?" という文から差引かれると考える。同様に、応答文も話者の態度を表わす領域と命題を表わす領域に分割され、質問文中の命題を表す部分が応答文の空所の位置にコピーされると考える：

(25)



((25) の点線は、被前提節の命題が伝達部の空補文 *e* にコピーされることを示す)

(24) の質問文の命題部分が応答文の空所にコピーされることは (26) に示されるように正しい結果を生む。

(26) Response: It's possible [$_{CP}$ [-wh] John left].

2.2. 間接平叙文と間接疑問文との間の曖昧性

次に (27) の談話を考えてみたい。

(27) Question: Did John leave?
Response: I don't know.

ここでは応答文中の述語 *know* の意味選択と統語上の範疇選択は満たされているとして、先行文とゼロ形態素との照応関係が保証されていると考える。ここでも (25) で考えたような空補文照応の解釈ルールが働くとして、応答文の空所に先行する質問文の命題部分がコピーされる。

(28) Response: I don't know [$_{CP}$ ϕ].

ここで重要なのは、(29) と (30) で示されているように、このルールが被前提節の命題部分を空補文にコピーするものの、補文標識の素性の選択に関しては言語文脈に依存しているということである。wh 補文がここで好まれるのは、先行する文 "Did John leave?" が質問を表し、"I don't know" という否定を含む表現が間接疑問を補部にとる傾向があるという要因によるものと思われる。

(29) Response: I don't know [$_{CP}$ [+/-wh] [John left]].

(30) a. I don't know [$_{CP}$ (that) John left].

b. I don't know [$_{CP}$ whether John left].

これに関連して Halliday and Hasan (1976) が挙げている次の談話を考えてみたい。

(31) I think the cheque is still valid. The bank can tell them.

(Halliday and Hasan 1976: 220)

補文選択に関して、動詞 *tell* の補文タイプと意味タイプは (32) のように表わすことができる。

(32) tell [____ NP CP], [____ P/Q]

この補文選択で空所が them の直後に生じることを認可する。このことは (33) で示すとおりである。

(33) I think the cheque is still valid. The Bank can tell them [$_{CP}$ ϕ].

ここで空補文に関する意味解釈ルールが作動する。まず被伝達節を見ると、モダリティーを表わす表現 *I think* があるので、この表現は空所位置にコピーされない。主節の *I think* という語の連鎖は統語構成素をなしているのではなく意味上のユニットを形成していることに注意したい。それゆえ、命題で表されている意味内容 "the cheque is still valid" が伝達節の空補文の位置にコピーされることになる。

(34) I think the cheque is still valid.

The Bank can tell them [$_{CP}$ [+/-wh] [the cheque is still valid]]

空補文に関するルールは被前提節から命題部分とモダリティーを表わす部分を分け、命題部分を空所位置にコピーすることで仕事を終える。しかし、先行詞を復元するにあたっては被前提節の命題をコピーしただけでは不十分であり、CP の指定部の wh 素性の指定をする必要がある。この場合、補文省略を許す伝達動詞 *tell* が平叙文と yes-no 疑問文のどちらでも導くことのできる動詞であるため、下に示すように、間接平叙文 (indirect statement) と間接疑問文 (indirect question) との間で曖昧性を持つことになる。

(35) a. The Bank can tell them that the cheque is still valid.

b. The Bank can tell them whether the cheque is still valid or not.

間接平叙文と間接疑問文との間の選択は談話や関連する要因に依存している。

2. 3. 間接疑問を引き起こす要因

次に Grimshaw が挙げている下の談話を考えてみたい。

(36) Statement: Guess what, John is telling lies again.

Response: It's obvious.

この例は彼女が補文選択に関する自分の理論を支持するために挙げているものだが、面白いことに彼女は NCA rule を説明する一方で、この談話に

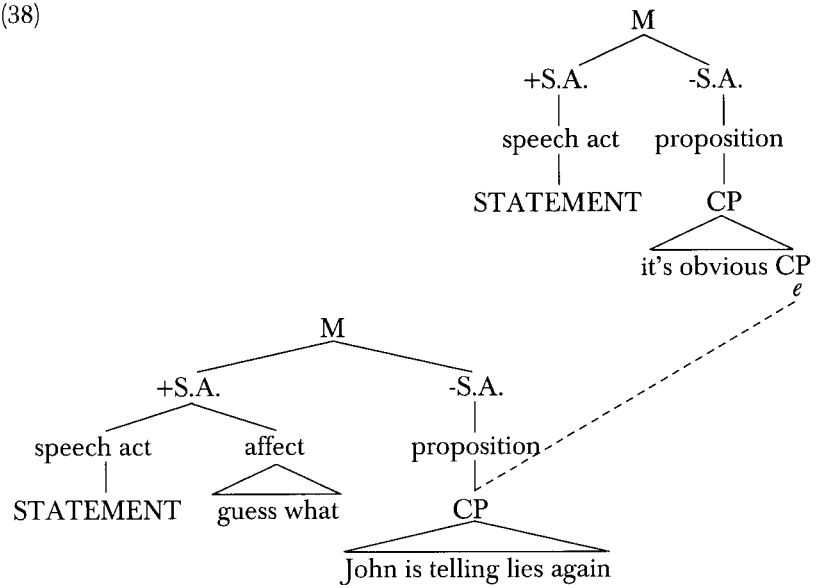
ついては説明していない。統語論に基ずく LF 指向の分析を採用している研究者にとっては、*guess what* のようなモダリティーを表わす表現は問題の対象にならないのである。繰り返しになるが、重要なことは文の意味が命題を表す部分と話者の心的態度を表す部分（＝命題を外から規定する部分）で構成されていることである。

さて、(36) に戻ると、空補文の解釈規則が応答文の意味解釈に適応される。まず初めに、述語 *(be) obvious* の統語特性が補文タイプとして CP を選択し、意味タイプとして補部に P を選択する。そしてこの仮定に基づき、音韻的に空の照応要素が述語の補部の位置に生起していることが認可される。

(37) It's obvious $[_{CP}\ \phi]$.

空補文の照応詞は先行する発話 "Guess what, John is telling lies again." を被前提節とするが、挿入的に用いられているモダリティー表現である *guess what* は空所の先行詞の一部にはならない。この文頭に置かれた離接詞 (disjunct) は *to my surprise* とか *actually* といった意味のモダリティー表現～(38) の表記では affect の一種とみなす～であり、空補文の意味解釈をする際には発話から差し引かれるものと考えられる。このため、残りの発話 "John is telling lies again" が先行文の命題に対応するものとなる。

(38)



次に (39) の談話を検討する。

(39) She might be better living away from home. I'm not sure.

(Halliday and Hasan 1976: 219)

ここでは認識様態を表す助動詞 *might* が被前提節である先行文に現れている。[7] (40) で示されているように、統語範疇に関する補文選択で空補文が認可されることになる。

(40) She might be better living away from. I'm not sure [$_{CP}$ ϕ].

(40) では *I am not sure*ϕ の空補文は先行する文全体を指すのでなく、被前提節からモダリティーを表わす *might* を差し引いた部分が対応すると考えられる：

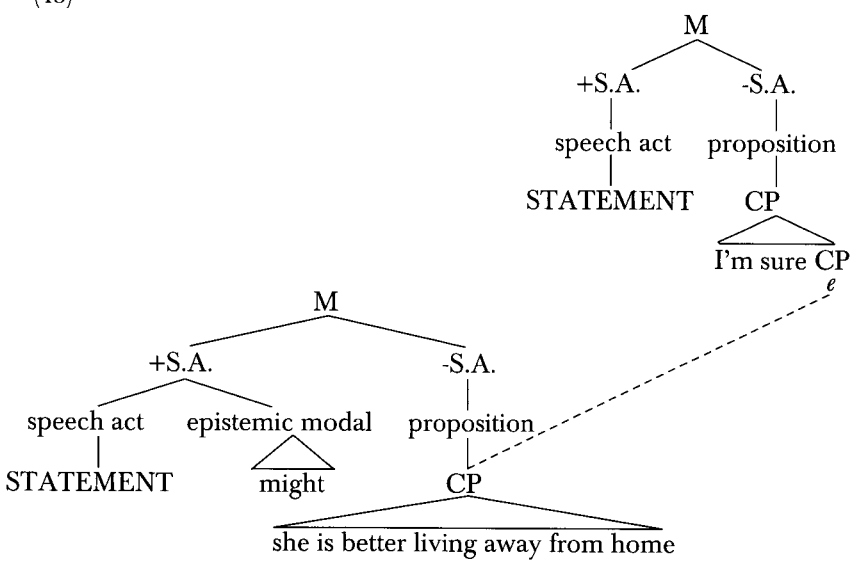
(41) She is better living away from home.

ここでも同じように確認していくと、(42) に示すように述語 *be sure* は補文タイプとして CP を指定し、意味タイプとして Q か P を取る。

(42) *sure* [____ CP], [____ P/Q]

次に、この談話の先行文が空補文の被前提節としてみなされ、話者の心的態度を表す部分とそうでない部分に分けられる。このプロセスは (43) に示すとおりである。最後に、被前提節の命題部分が空補文にコピーされる。

(43)



ただし、この作業はあくまで被前提節の命題部分を空補文の位置にコピー

するだけであって、補文標識の選択まで指定していない。空補文は CP anaphor であるため、補文標識の素性に関する情報を指定しなければならない。ここではその素性は [-wh] ではなく [+wh] が選択されると思われる。*be not sure* が [+wh] 素性を誘発すると考えられるからである。ここでも [+wh] の素性の指定は談話（この例では被伝達節の助動詞の意味、伝達節の時制と極性）に依存している。

(44) I'm not sure [$_{CP}$ whether/if [she is better living away from home]].

被前提節である先行文が違っていれば、*be not sure* が下に示すように、[-wh] の素性をもつ補文標識をとることも可能である。

(45) I'm not sure [$_{CP}$ [-wh] [that's a good idea]].

それゆえ、否定の述語が wh 補文を取るという顕著な傾向はあるものの、*be not sure* がいつも [+wh] の素性を指定するとは限らない。補文標識の素性の指定は全面的に談話に依存していることを (46) で確認しておきたい。

(46) a. The cheque may still be valid. The Bank can tell them.
b. The cheque may still be valid. The Bank told me.
(Halliday and Hasan 1976: 221)

(46) の談話も Halliday and Hasan (1976) にあったものであるが、彼らの空補文の解釈によると、(46a) と (46b) のそれぞれの談話において、間接平叙文と間接疑問文との間で曖昧性は「おそらくないだろう」という。(46a) では述語が補文標識に指定する素性は [+wh] になる一方で、(46b) では

[-wh] になるという。(46a) では被伝達節内の法助動詞が wh 補文を誘発し、(46b) では伝達節中の動詞の過去時制が that 補文を誘発すると考えられる。

(47) a. The cheque may still be valid.
The Bank can tell them [whether the cheque is still valid].
b. The cheque may still be valid.
The Bank told me [(that) the cheque may still be valid].

2. 4. 見かけの反例

補文標識の wh 素性について曖昧性を示す (31) と (46) を比べてみよう。

(31) I think the cheque is still valid. The bank can tell them [$_{CP}$ ϕ].

(46) a. The cheque may still be valid. The Bank can tell them [$_{CP}$ ϕ].
b. The cheque may still be valid. The Bank told me [$_{CP}$ ϕ].

(31) ではモダリティー表現である *I think* を含み、(46) では認識様態を表わす法助動詞の *may* を含んでいるが、被前提節から復元される命題を表す部分が (31) と (46b) では異なっている。(46b) に関しては、空補文にコピーされる被前提節の命題部分が *the cheque may still be valid* となる。空補文の意味解釈においては、空所が述語の補文選択に関して統語的・意味的に認可されたあと、被前提節から speaker's attitude を表す部分が差し引かれて、命題部分が空補文にコピーされることを見ているが、ここでは *may* が差し引かれないことに注意したい。一見すると、これは上で述べた先行詞復元の方略の反例のように見られるが、「その小切手はまだ有効かもしれない」という被前提節の中の *may* が話し手の心的態度を表わしているのではな

く、銀行の意見を表すものであるので反例にはならないことを指摘しておきたい。

2. 5. まとめ

先行詞の復元に際しては、補文省略構文に現れる述語がとる補文の統語・意味タイプと一致するものが被前提節の中から抽出されて空補文にコピーされるが、補文の wh 素性については伝達節の時制、否定要素、被前提節中のモダリティーなど様々な要因によって語用論的に選択されることを述べた。なお、本節では伝達文と被伝達文の意味タイプの照合をするところから議論を始めたが、両者の意味タイプは必ずしも一致している必要はなく、下の例でわかるように空所を認可する述語が *ask* などの場合、被伝達文が平叙文であっても疑問文として解釈されることを確認しておく：

(47) I did everything I could: ask Kim _____ .
(I did everything I could: ask Kim [$_{CP}$ whether I did])
Huddleston and Pullum (2002: 1529)

これまでは言語学の文献に現れた例を中心に見てきたが、(48) から (50) にはコーパスから得られた実例を挙げた。これまで検討してきた例文は応答文に定形補文の省略が見られるものだったが、実際には応答文が複数あって、それぞれの空補文が先行文の命題に対応している (48) のような複雑なかたちで出てくることもある。また、被前提節に認識様態を表す法助動詞が出ている例を上で検討したが、あれなども言語学の論文用に出てくるけれども実際にはほとんど使われないような例ではなく、(49) のようにしばしば観察されるものである。さらに、(50) の例のように複数の応答文の空補文が先行する複数の文の命題をそれぞれ受けているのか単一の被前提

節の命題を受けているのか、という前提の領域が不確かな例もあることを指摘しておきたい。

(48) A: Is he going to Arkansas on the way to Houston?
B: It's possible. But I don't know yet. (*CSPAE*, WH94)

(49) A: I think that might be appropriate.
B: Jay, I don't know. (*CSPAE*, COMR6B97)

(50) A: Ann, was the President blindsided by this? Did he know that this possibility of recommendation was in the wind? And is he angry about this controversy?
B: I don't know. I'll try to find out. (*CSPAE*, WH97B)

3. 補文省略を許す述語

3. 1. 挿入節の補文省略構文

本稿で扱ってきた補文省略構文は、(51) に示すように被前提節の応答として機能する文に生じているもので、典型的には、(51a) で見られるように、質問文に対する応答文として、また (51b) に見られるように、ある陳述に対しての応答文として生じる。応答文中に省略されていると考えられる補文の意味解釈が談話に依存している点で「談話依存の補文省略構文」と呼ぶことにする。

(51) a. Question: Who left?
Response: I don't know.

b. Statement: Guess what, John is telling lies again.
Response : Yeah, I've already found out.

このような談話依存の補文省略構文は、(52) で示されるような（厳密には、*as* のような従属接続詞で導かれているのではない）挿入節中に現れる空補文に類似している。このように挿入節中に生じていると空補文を含む文を「挿入節の補文省略構文」と呼ぶことにする。

(52) John is telling lies again, I've found out.
(52') John is telling lies again, I've found out [$_{CP}$ ϕ].

(51b) と (52) を対照してみると、同じ述語 (have) found out が使われていて、同じ内容の補文が省略されていると考えられる。形態的には、(51b) では二人の人物による陳述文とその応答文という二つの独立した文のかたちをとっている一方、(52) の挿入節の補文省略構文では被前提節と挿入節が互いに完全に独立しているわけでもなければ、接続詞に導かれているわけでもないという並列関係にある。

両構文の類似点については、まず最初に、使用される述語が一部重複していることがあげられる。次の例を見てみよう。

(53) Question: Has the Mayor resigned?
Answer: I don't know/John wouldn't tell me/Ask Bill/I haven't found out yet/ Guess/I'm not sure/...
(Grimshaw 1979: 290)

(54) a. And it's a wonderful way to take something that they can move

and exchange, I agree. (*CSPAE*, COMR6A97)

b. There are two kinds of missing complement sentences, I've found out.

c. We got a lot of important issues out on the table. And they'll serve us well down the road, I'm sure. (*CSPAE*, COMR6A97)

d. Well, there's couple of parts to that question, I guess. (*CSPAE*, WH97A)

このように両構文に用いられる述語に同じものがあるが、挿入節の補文省略構文では述語は基本的に肯定形でなければならない。[8] 次の例文で確認しておこう。

(55) a. *The Mayor has resigned, I don't know.

b. *There are two kinds of missing complement sentences, I didn't find out.

c. *It will rain tomorrow, I don't hope.

(55) では挿入節が被伝達節の命題内容を断定していなければならないという意味的な制限に違反しているため不適格とみなされる。[9] 従って、挿入節中の述語は通常、否定形を取ることはない。これに対して、談話依存の補文省略構文はそのような制約を受けない。(53) の例でわかるように、談話依存の補文省略構文には否定形の述語が生じることもある。

また、*that*-補文をとり、典型的に挿入節の補文省略構文に用いられる述語のいくつかは談話依存の補文省略構文では用いられないという事実も指摘しておきたい。そのような述語に (56) で示すように *believe, claim, think* がある。

(56) Statement: John is telling lies again.

Response:*I don't believe/*They claim/*I think.

(Grimshaw 1979: 292)

(57) John is telling lies, I believe/They claim/I think.

3. 2. 補文省略を許す述語の特徴

挿入節に用いられる述語のほとんどは Hooper (1975) のいう assertive predicates（断定述語）に限られるが、談話依存の補文省略構文に生じる述語の自然類 (natural class) を見い出すのは難しい。Fillmore (1986) も指摘しているように、(58) に示すように、*promise, find out, object* がこの構文に使用できるのに対して、それぞれの類義語である *vow, attempt, authorize, discover, oppose* が許されないのは説明できないように思われる。

(58) a. She promised ϕ. / *She pledged ϕ. / *She vowed ϕ.

b. They approved ϕ. / *They authorized ϕ.

c. She found out ϕ. / *She discovered ϕ.

d. I protested ϕ. / I object ϕ. / *I oppose ϕ. (Fillmore 1986: 99)

同様のことは *tell* が補文省略を許すのに *announce* が省略を許さないこと、*agree* が省略を許すのに *admit* が省略を許さないという点についてもあてはまる：

(59) a. A: Do they know that the President resigned?

B: Yes, I told them ϕ.

b. A: Do they know there will be no class tomorrow?

B: *Yes, I announced ϕ. (Grimshaw 1979: 290より一部改変)

(60) a. A: Louise has a great soul.
B: I agree ϕ.
b. A: Louise has a great soul.
B: *I admit ϕ. (Bresnan 1988: 154-155)[10]

このように補文の省略を許す述語の意味は一般的な規則から導くことができない (idiosyncratic) ものであるが、補文の省略が見られる環境をあらためて考えてみると *I don't know* や *I'm not sure* を代表とする間接応答 (indirect response) のコメントの文脈に見られることがわかる。間接応答とは相手の述べたことに対して定義どおりの意味で答えず、間接的に応答することである。相手の質問にストレートに答えず、コメントで受け答えをするということは、答えに対する話し手の態度を表明するということであり、答えがわからないとか、答えるのを承諾したり拒否したりという話し手の態度を表わす。また、間接応答は相手の質問だけに限らず、話し手が自分の述べた陳述に対しての何らかの態度を表明するという文脈にも見られる。

談話における相手または話し手自らの陳述（平叙文）・質問（yes-no 疑問文・wh 疑問文）に対する応答文中に補文の省略が可能なときには、補文省略構文で *say, tell, know, hear, report* などの伝達動詞、コメントを表わす *(not) sure/certain/clear* などの情報の確実さに関する述語、質問や推測を表わす *ask, wonder, guess* などの動詞、知識の有無に関する *know, find out, see, forget* などの動詞、可能性や同意や感情を表わす *(im)possible, (im)probable, agree, surprised* などの述語が使われる。以下は Halliday and Hasan (1976), Grimshaw (1979), Huddleston and Pullum (2002) の用例や筆者の収集した

用例に現れた補文省略を許す述語のリストである。

(61) *agree, ask, certain, convince, doubtful, explain, explain, forget, hear, impossible, improbable, inquire, know, mind, obvious, persuade, possible, probable, recall, remember, say, see, suppose*[11], *sure, tell, wonder*

3. 3. まとめ

本節では最初に、挿入節の補文省略構文と談話依存の補文省略構文はともに先行詞として定形補文を取り一部の述語が共通して用いられる点で類似しているが、挿入節の補文省略構文には断定性という意味的な制約があることを示した。次に、補文省略を許す述語の意味の類についての一般化は難しいものの、伝達やコメントを表わす間接話法をとる述語がこの構文に用いられることを指摘した。

4. おわりに

以上、本稿ではこれまでほとんど議論されてこなかった英語の定形補文省略現象を考察した。まず第 1 に、先行研究で null complement, missing complement などと呼ばれて取り扱われてきた現象を明確に区別し、これまでに提案されてきた空補文の分析を概観した。次に、省略されている補文の内容は何らかの方法で復元されなければならないため、発話行為理論を基にした解釈理論を利用して空補文の先行詞を復元する作業を試みた。そこでは、空補文は先行文の命題部分に対応するものの、先行詞を決定する際の補文標識の wh 素性の選択に関しては、先行文や応答文の極性や時制、モダリティーを表す表現の有無などの様々な要因に依存していることを論証した。第 3 に、定形補文の省略を許す述語について若干の考察を加えた。

注

* 本稿は、日本語用論学会第 5 回大会 (2002 年 12 月 7 日、於：関西外国語大学) において「Missing complement に関する一考察」という題名で口頭発表した原稿に加筆修正を加えたものである。発表に際して貴重なコメントをいただいた岸田譲次郎先生、田中廣明先生、森貞先生、吉田幸治先生に感謝したい。また、本研究の初期の段階でインフォーマントとして協力して戴いただけでなく、建設的な批判やコメントを下さった Mürvet Enç 先生、Bill Crawford さん、Conrad Treff さんに感謝したい。なお、本稿における不備や誤りはすべて筆者の責任である。

1 定形補文の省略は、生成文法の文献では「文照応 (sentence anaphora)」の一種とされ、文照応形の *it* (ia) や *so* (ib) をとる場合や wh 句で始まる間接疑問文の一部を残す Sluicing（間接疑問縮約）(ic) とは異なり、統語的にも音韻的にも欠如項を残さない点で区別される。

i) a. They say that she's fat now, but I don't believe *it.*

b. Do you think they can come tonight? I expect *so.*

c. John is going to invite somebody to the party, but I don't know *who.*

（今西・浅野 1990: 243）

2 *CSPAE* コーパスの後のアルファベットは議事録の名前の略号を表わし、その次の数字は年または月を示す。さらに、その後に付されるかもしれない A または B の文字は同一の議事録の前半または後半を表わす。例えば、「WH94」は 1994 年のホワイト・ハウスにおけるプレス・コンファレンスの議事録を示し、「COMM8A97」は 1997 年 8 月の全国数学テスト会議 (National Meetings on Mathematics tests) の後半の議事録を示す。詳しくは、*CSPAE* または付属のマニュアルを参照のこと。

3 動詞の語彙的特徴、動詞と項の従属関係、認知などに関わるため、語彙意味論、結合価 文法 (Valence Grammar)、語彙機能文法 (LFG)、認知意味論の分野での議論が中心となる。

4 (16b) では補文標識 *that* の生起が随意的であることが示されてされているが、実際には *that* の有無により語用論的意味の違いが生じることがある（岸田譲次郎先生のご指摘による)。これに関しては稿を改めて論じたい。

5 *agree* は意味タイプとして P を取るので、*#I agree (that) John left.* として先行詞

が復元されたとしても、ここでは容認されない。その理由は *agree* を含む肯定の応答は yes-no 疑問文には不適切だからである。

6 Grimshaw は過去完了形を使って "Yeah, I'd already found out." としているが、このままでは不適格となるため現在完了形を使って訂正した。

7 Huddleston and Pullum (2002: 1529) は法助動詞の *may* は疑問文の解釈を誘引する (trigger) として、次の例を挙げている：*He may have committed suicide. We'll never know* ____ . 彼らは下線部分が "whether he committed suicide or not." として解釈されると述べている。

8 本稿では、The door isn't closed, *I don't think.* のような有標の否定の挿入節は扱わない。

9 ただし、以下のように統語的に否定の形をとっていても挿入節全体の意味が肯定になっていれば使用できる。

i) a. The flight from Chicago is, *don't forget*, due at 11:35 A.M.

b. Dr. Tanaka, *I don't doubt*, is the best pediatrician in Mito.

10 たしかに、統語特性も意味特性も同じと考えられる 2 つの動詞（たとえば、*find out* と *discover*）で片方は補文省略を許し、もう一方は許さないということを一般的な形で述べるのは難しい。細部の意味の違い（つまり、述語の個別的な語彙特性）によるものと考えられる。(55) では、*agree* が他人の意見に賛同して同じ意見を持つという意味に対して、*admit* は他人が正しいと思うことをしぶしぶ認めるということであり、両動詞は他人の意見や考えを共有するという基本的な意味は同じであるが細部の意味に違いがある。

11 suppose については (10) で示したように Napoli (1983: 1) が以下の例をあげている。

(10) a. Is he coming?

b. I suppose.

Huddleston and Pullum (2002) はアメリカ英語とオーストラリア英語では補文省略構文に用いられるが、イギリス英語では代用形 *so* をとると述べている。

コーパス

Barlow, M. 1998. *The Corpus of Spoken Professional American-English. (CSPAE)* Houston: Athelstan.

参考文献

Bresnan, J. 1982. "The passive in lexical theory." In J. Bresnan ed. *The Mental Representation of Grammatical Relations*, 3-86. Cambridge, Mass.: The MIT Press.

Espinal, T. 1991. "The representation of disjunct constituent." *Language 67*, 726-762.

Fillmore, C. 1986. "Pragmatically controlled zero anaphora." *BLS 12*, 95-107.

Ford, M., J. Bresnan, and R. Kaplan. 1982. "A competence-based theory of syntactic closure." In J. Bresnan ed. *The Mental Representation of Grammatical Relations*, 727-796. Cambridge, Mass.: The MIT Press.

Grimshaw, J. 1979. "Complement selection and the lexicon." *Linguistic Inquiry 10*, 279-326.

Halliday, M. A. K., and R. Hasan. 1976. *Cohesion in English.* London: Longman.

Hankamer, J. and I. A. Sag. 1976. "Deep and surface anaphora." *Linguistic Inquiry 7*, 391-428.

Hooper, J. 1975. "On assertive predicates." In J. Kimball ed. *Syntax and Semantics 4*, 91-124.

Huddlston, R. and G. Pullum (eds.). 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language.* Cambridge: Cambridge University Press.

今西典子・浅野一郎. 1990. 『照応と削除』東京：大修館書店.

Lahiri, U. 2002. *Questions and Answers in Embedded Contexts.* Oxford: Oxford University Press.

Lyons. J. 1977. *Semantics.* Volume 2. Cambridge: Cambridge University Press.

中右実. 1994. 『認知意味論の原理』東京：大修館書店.

Napoli, D. J. 1983. "Missing complement sentences in English: A base analysis of null complement anaphora." *Linguistic Analysis 12*, 1-28.

Williams, E. 1977. "Discourse and logical form." *Linguistic Inquiry 8*, 692-96.